世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

小学校低学年生の動機付けを目的とした生活科における防災教育ツールの開発

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-03-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 伊村, 則子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1778

小学校低学年生の動機付けを目的とした生活科における防災教育ツールの開発

Useful Material in Lower Grade Classes of Life Environment Studies for Motivation of Disaster Mitigation in Elementary Schools

伊　村　則　子

1　はじめに

日本は世界有数の地震国であり、1995年阪神・淡路大震災や2004年10月新潟県中越地震など被害地震が発生し、東海地震発生の切迫性も指摘されている。中央防災会議によると首都直下で地震が発生した場合、最悪のケースで死者は東京、神奈川、埼玉の1都2県で約1万2,000人となり、阪神・淡路大震災の2倍を上回る被害が想定されている。このような状況の中、国民が防災について考える機会は増えているようであるが、災害に対する関心は高いとはいえない。国民の防災意識を高め、防災知識を啓発し、また防災体制の整備に対する取り組みを一層強化していくことが課題となっており、防災教育の重要性が指摘されている。

そこで、本研究では、幼少期の子供たちの防災意識の啓発、防災教育に注目し、防災教育を学校教育に組み込むことを目標に、小学校低学年独特の教科である生活科に注目し、生活科における防災教育の展開を目指し教育ツールを開発することを目的としている。生活科の教育内容を明らかにし、生活科において防災の知識を身につけさせながら、興味を持たせ、自ら学ぶなど、動機付けができる教育ツールの開発を目的としている。

2　幼少期における防災教育の変遷

戦前・戦後の防災教育の経過は文献1，2に詳しい。以下に防災教育の変遷をまとめる。

2.1　戦前の教育

戦前の国語や修身の教科書には、実際の災害を題材にした防災に関する物語や実話が多く存在し、暗黙のうちに児童･生徒は防災について学ぶ機会があり、教科書が意識啓発を行う役割を担っていたことがわかった。

第二次世界大戦以前の防災教育教材として、国語の教科書では、小学校の「稲村の火」が有名であるが、これ以前にも第1期国定教科書（明治36年～42年）尋常小学校読本5の「雷のおちた話」、高等小学読本3の「天気予報と警報」、及び高等小学読本4の「火山」などがある。続いて第2期国定教科書（明治43年～大正6年）には尋常小学読本巻8に「火事」、巻9に「水害見舞いの文」、巻12に「天気予報及び暴風雨警報」などがあり、第3期国定教科書（大正7年～昭和7年）

には尋常小学読本巻5に「水見舞い」、巻7に「二百十日」などがある。

また、修身教科書には、第2期国定教科書の尋常小学読本3の「ものごとにあわてるな」が最も古い。この話は第4期国定教科書（昭和8年～昭和15年）になると昭和2年の丹後地震を題材にして、小学生が落ち着いた行動で地震火災を防いだ実話を扱うようになる。また、同時期の尋常小学校修身書巻4には、当時の大災害であった室戸台風を素材にした「沈着」が掲載されている。さらに、第5期国定教科書（昭和16年～20年）の初等科終身には「消防演習」（現在の避難訓練）があり、初等科修身2には関東大震災で焼け残った神田佐久間町を扱った「焼けなかった町」が掲載されている。

2.2 戦後の教育

第二次世界大戦が終結すると、戦前の道徳教育が「修身」とともに姿を消して、他の教育内容においても防災に関連する記載はほとんどなくなった。むしろこの時期は、学校の管理･運営の制度を確立することが課題とされたので、防災面は学校管理のみに委ねられていたといえる。また、高度経済成長期をはさんで、都市の近代化、産業化による災害増加への配慮から「生活安全」や「交通安全」に重点がおかれ、防災教育は、これらに「災害安全」を加えて「安全指導」として取り組まれた。戦前と比較すると、教科における防災教育は下火になり、防災教育が単独で取り上げられる機会も減少した。

2.3 阪神・淡路大震災以後の教育

1995年阪神・淡路大震災を契機に、従来「安全教育」の部分として位置づけられていた「災害安全指導」がよりクローズアップされ、初めて「学校における防災教育」が登場した。これにより、生活安全や交通安全とは別枠で社会科での防災教育や道徳、学級活動での防災教育が行われるようになる。文部科学省は生きる力をはぐくむ防災教育を展開し、参考資料を示している[3)]。生活のすべてに関わる防災というテーマに、学校教育がどのように取り組むべきかが課題であり、特別活動・道徳・教科教育といった横断的な領域で扱うべきか、「総合的学習の時間」で柔軟により重点的に取り組むべきか、など様々な試行錯誤が積み重ねられてきている。

小学校では、全校児童一斉の避難訓練が実施されている。これは授業中や休み時間中に地震発生の放送が流れ、机の下にもぐるなどの対処行動をした後、すみやかに校庭に避難し、集まって教員や消防士の話を聞くといったものである。低学年には特に「火災から生命を守る方法を知ること」「地震の時、安全に行動できるようにすること」「おかしもの徹底」を主に教え、高学年になると消火体験やオリロー体験（避難はしご体験）、起震車体験などを行う小学校もある。

生活科（1、2年生）における取り組み（墨田区堤小学校[4)]「ぼうさいだんちたんけん」）や、総合的な学習の時間を使った事例などがあるが、静岡県教育委員会の調査[5)]（平成15年12月実施）によると、総合的な学習の時間における防災教育の実施状況は静岡県ですらさほどよくない。一方、社会科では、学習指導要領[6)]には『「災害」については、火災、風水害、地震などの中から選択して取り上げ、「事故」については、交通事故や盗難を取り上げるものとする』という記述あり、社会科においては必然的に防災教育が行われていることがわかった。地震や火災などについて学ぶ機会があり、防災教育に関係する教育がされている[7)]ことがわかった。地域の消防署へ見学に行っ

たり、防災地図を作成したりする例も見られる。しかし、社会科も3年生からの教科なので、低学年における取り組みではない。

以上より、戦前の国語教科書や修身教科書の中には防災についての物語を教材とするものがあり、子供たちの意識啓発につながっていたことがわかる。現在、小学校では避難訓練に加えて学級活動・生活科・総合的な学習の時間・地域での活動などで防災教育が行われている。[3] しかし、その実施状況にはばらつきがあり、そのほとんどを避難訓練に頼っている現状がうかがえる。

3　生活科における防災教育

3.1　生活科の概要

生活科とは、平成4年度から低学年の理科と社会科が廃止された代わりにこれら二つの教科の「合科」として設置されたものである。学習指導要領[6] に示された生活科の目標は『具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。』（下線部は防災教育に関連すると思われる部分で筆者により加筆）ことであり、3年生からの総合的な学習の時間の前段階としての役割も担っている。また、生活科は1・2年生の全教科の時間数の12～13%を占め、週3時限（1時限＝45分）程度行われる。

生活科の内容は、**表1**左側に示す①～⑧のように、学習指導要領により8つに分けられている。

3.2　生活科と防災教育

文献調査[8] より、生活科は低学年の理科・社会科の代わりとなる他に、生活科では見る・調べる・作る・探す・育てる・遊ぶなどの学習活動を通して、自然とのかかわり・社会とのかかわり・自分へのかかわりなどに関心を持ち、体験をもとに自分の頭で考え、意見交換をするとともに、子供が獲得した体験を、言葉・絵画・動作・劇化などを通して表現すること、また、その過程において、「いきる力」の習得を目標としているということがわかった。

3.2.1　生活科の教科書

平成16年度使用の文部科学省検定済の生活科教科書上下巻20冊（上下巻各10冊）[9～18] における防災に関する記述を分析した。生活科教科書はイラストや写真を中心に構成されているため、防災に関連するイラスト・写真の有無を調査し、表にまとめた。出版社別にみた調査結果を**表2**に示す。**表2**は防災に関連するイラスト・写真の掲載があった教科書の欄に「●」を付した。

防災に関連するイラスト・写真は、上巻では消火器・非常口・避難所・消火栓が、下巻では消火器・非常口・避難所・消火栓・消防車・消防署・消火用水が掲載されていた。出版社ごとに見ると、すべての出版社の教科書に1つ以上は防災に関するイラスト・写真の掲載があった。記載のあるイラスト・写真の中では消防署が一番多く、これらはテーマとして児童に身近で実際に行って確かめられるものが選ばれているということが推察される。また、上巻よりも下巻のほうが掲載数が多く、生活科での学習範囲の広がりに伴って、防災に関する用具・場所に出会うことが多くなるということが考察できる。

表１　分類に使用した内容と抽出した項目

内　　容	抽出した項目
①学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり，楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに，通学路の様子などに関心をもち，安全な登下校ができるようにする。	a)学校を探検 b)学校の周りを知る c)友達作り
②家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考え，自分の役割を積極的に果たすとともに，規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする。	d)家族 e)自分でできること
③自分たちの生活は地域の人々や様々な場所とかかわっていることが分かり，それらに親しみをもち，人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。	f)公園で遊ぼう g)まちを知る
④公共物や公共施設はみんなのものであることやそれを支えている人々がいることなどが分かり，それらを大切にし，安全に気を付けて正しく利用することができるようにする。	
⑤身近な自然を観察したり，季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりして，四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに気付き，自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできるようにする。	h)草花や虫と遊ぼう i)季節を見つける j)生き物を探す k)夏休み l)冬休み m)季節を見つける n)フェスティバル
⑥身の回りの自然を利用したり，身近にある物を使ったりなどして遊びを工夫し，みんなで遊びを楽しむことができるようにする。	o)遊び図鑑 p)作って遊ぶ
⑦動物を飼ったり植物を育てたりして，それらの育つ場所，変化や成長の様子に関心をもち，また，それらは生命をもっていることや成長していることに気付き，生き物への親しみをもち，大切にすることができるようにする。	q)植物を育てる r)動物を探す・飼う
⑧多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと，自分でできるようになったこと，役割が増えたことなどが分かり，これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに，これからの成長への願いをもって，意欲的に生活することができるようにする。	s)人とのかかわり t)自分の幼い頃
その他	u)見つけたことを教える

※下線部は防災教育に大切だと思われる部分、及び防災教育を組み込むことが可能と考えられる項目であり、筆者が加筆した。

一冊の教科書全体としては、数量的には記載は０～５個と少なく、生活科の中で防災に関する教育はあまりなされておらず、あまり注目されない存在であることがわかったが、しかし一方で、生活科の教科書の中に防災についての記載があることがわかり、今後生活科の中に防災教育を組み込んでいく可能性があるのではないかと考えた。

表2　出版社別みた防災に関連するイラスト・写真の掲載状況

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
消火器		●		●	●				●	
非常口		●		●						
避難所				●				●	●	●
消火栓				●			●	●		
消防車	●									
消防署	●		●	●	●				●	
消火用水						●				

3.2.2　生活科の学習目標

小学校学習指導要領に定められている生活科の目標は「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」ことである。（下線部は、防災教育に大切だと思われる部分で筆者が加筆した。）

実際に災害を体験した地域の人々や、大地震直後に人々の防災意識が高まることから、防災訓練など具体的な活動や疑似体験は防災意識を高めるのに有効であることがわかる。学習指導要領の生活科の目標にある「具体的な活動や体験を通して」という部分と防災意識の啓発に重要な要素の接点を見つけることができる。

また、防災教育は、生きる力を育むことにもつながり、児童が自ら身を守る術を身につけたり、災害に備えることを学んだりすることである。これは、「生活上必要な技能・自立への基礎を養う」という生活科の目標と一致する部分があるといえる。

また、下線部以外も、防災教育に取り入れていくことで、さらなる効果を期待することができる。例えば、人や社会とのかかわりや、自分の生活を見直す中で防災教育を行うことによって、体験活動を通して得た知識がより具体的になり、児童が理解しやすく身につきやすいものになると考えられ、生活科の目標は全体的に見ても防災教育に重要と思われる要素と共通している部分が多いことがわかった。

3.2.3　学習指導要領による内容

小学校学習指導要領に定められる生活科の内容は上述したように、**表1**左側に示す①～⑧の8点であり、防災教育を展開できる可能性があると考えられる内容に、筆者が下線を付した。

小学校1・2年生の児童は保護者と一緒にいない時間が次第に増えるため、学校や通学路、家庭内においても自分で自分の身を守ることを知っておく必要が生じる。身を守ることについては、生活科の授業内容においては交通安全や怪我をしないよう行動することを中心に教育を行っているが、ここに防災の視点を加えることも重要である。特に、（1）にあるような登下校中の安全については、災害時に、行動の指示を与える保護者がいないため、交通安全と共に非常時の行動について教育する必要が大きいと考えられ、防災教育を組み込む可能性が指摘できる。また、（2）や（8）にあるように、自分のできることや自分の役割を認識するという点でも、日頃からの防災対策や避難方法、家庭内の対策において自分のできること、児童の担う役割を認識することとの関連性をもたせることができると考えられる。

以上のように、生活科の内容には防災教育との接点となる内容があり、防災教育を組み込める可能性のある部分が多く存在する。また、防災に関する内容を加えることで、生活科の目標である「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」ことを達成しやすくなると考えられる。

4　生活科教科書の内容分析

4.1　分析方法

上述した生活科教科書全20冊について、内容分析を行った。学習指導要領に示された８つの内容と、自ら抽出した55項目によって分類し、掲載ページの全ページに対する割合によって分析を行った。項目の抽出は教科書を見ながら、活動内容が同じであると思われるものをまとめ、それらに項目名をつけていった。さらに、抽出した項目を内容により学習指導要領の８つの内容に分類した。その結果を**表１**に付記した。

4.2　分析結果

生活科の教科書内容を、学習指導要領に示された内容８つに分類した分析結果を**図１**（①～⑧は**表１**左側に示す学習指導要領の内容に対応）に、抽出した55項目で分類した分析結果を**図２**（a)～u）は**表１**右側に示す抽出した項目に対応）に示す。例えば、**表１**の内容⑦や⑤はページ数が多く全体の約40%をしめるのに対して、防災教育の内容を組み込むことが可能な項目はないことがわかる。このように、生活科教科書の中で実際に多い内容や項目と、防災を組み込めることが可能と考えられる内容や項目にはずれがある。したがって、防災教育はどの教科書にも載っている内容・項目の中で展開できるように教材内容を考えることが効果的であることがわかった。

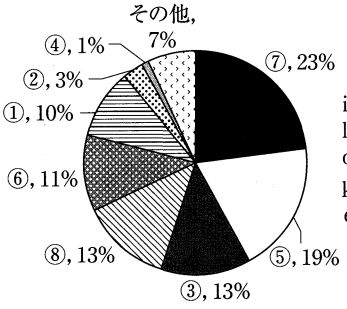

図１　内容の構成比

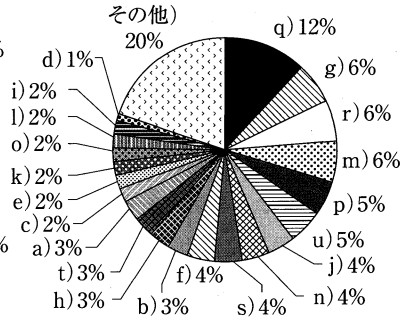

図２　項目の構成比

5　生活科で防災教育を行うための補助教材の作成

5.1　学習内容の選定・制作

防災教育として小学校１・２年生に教えるべき項目を「実際に教科書に写真やイラストが載っていたもの」「幼少期の児童への防災教育として必要なもの」[19]「その他に小学校低学年に必要であると考えられること」の３つの視点から検討し選定した。選定した学習項目を教科書の内容分析の結果と比較し、分析結果より得られた防災教育を組み込めると考えられる項目に対応させ、**表３**のマトリクスを作成した。補助教材は、写真と絵を中心に考えながら学べるものにし、書き込み式の部分を設け学習の成果がみえる構成にした。

表３　生活科教科書内容分析と学習項目の比較

選定した学習項目 ＼ 教科書内容の項目		学校探検	学校の周りを知る	地図を作る	教えてもらう	自分でできること	人とのかかわり	町を知る
対象学年		1	1，2	2	1，2	1，2	1，2	2
用具など	消火器	●	●	●				●
	非常口	●	●	●				●
	避難所	●	●	●				●
	消火栓	●	●	●				●
	防火水槽	●	●	●				●
	備蓄庫	●	●	●				●
家族	家族との話し合い				●	●		
	家での地震時の対処				●	●	●	
場所別避難方法	教室	●				●	●	
	校庭	●				●		
	通学中		●			●		●
	公園		●			●		●
	体育館	●				●		
	給食中	●				●		
	家庭				●	●		
他	通報の仕方				●	●		

5.2　評価と改訂

作成した補助教材を、小学校１・２年生の担任を務める教員２人（１年生の担任教師は生活科主任）と、小学校低学年の子供を持つ親３人、そして小学校低学年の子供３人（１年生２人、２年生１人）に見てもらい評価を受けた。評価は、教員に対しては「見た目、内容、生活科で本教材を扱う可能性、解説の内容、子供が受ける印象、その他」についてヒヤリングを実施し、保護者に対しては「見た目、内容、解説の内容、子供が受ける印象、その他」について記述式で回答してもらい、子供については子供の意見や反応を保護者を介したヒヤリング調査を実施した。

表4　補助教材に対する指摘と改訂

タイトル名	内容	指摘事項		改訂後のタイトル名	内容	改訂事項
じしんってなあに？	• 地震とは何かを知る • 被害を知る • 対策を知る	• 被害写真は1枚でいい • 防災頭巾はかぶっているところの写真がいい	1	じしんってなあに？	• 地震とは何かを知る • 被害を知る • 対策を知る	• 被害写真を1枚に削減 • 対策の写真を防災頭巾のみに削減
学校たんけん	• 学校の中で消火器・消火栓・非常口・防災頭巾・防災倉庫などを探す • 使い方・役割を知る • 教室での地震時の対処について学習する	• 写真の掲載を少なくする • 書き込む量が多い • 「あぶないときどうするの?」とのつながりをもたせる • 逃げるときにハンカチを口に当てることも教えるべき	2	学校たんけん	• 学校の中で消火器・消火栓・非常口などを探す • 使い方・役割を知る • 教室での地震時の対処について学習する	• 写真を非常口、消火栓、消火器の3枚に削減 • 防災頭巾・防災倉庫・カンパン・水の写真を削除 • 「にげるときはハンカチをくちに！」を追加 • 書き込み部分を削減
つう学ろ・こうえんたんけん	• 校外において消火栓・防火水槽・防災倉庫・防災ポスターなどを探す • 道や公園にいる時の地震時の対処について学習する	• 写真の掲載を少なくする • 書き込む量が多い • 内容としては大切	4	つう学ろ・こうえんたんけん	• 校外において消火栓・防火水槽・防災倉庫・防災ポスターなどを探す • 道や公園にいる時の地震時の対処について学習する	• 写真を消火栓（看板）・防災ポスター・消火栓・防火水槽の4枚に削減 • 右ページの写真を削除 • 書き込み部分を削減
おうちのひとにもきてみよう	• 家での地震対策にはどんなものがあるかを保護者と一緒に探す • 非常時の連絡方法や連絡先について家族で話し合う	• 書き込む量が多い • 「たいさく」は言葉が難しい • 写真がわかりにくい • 親戚の連絡先はまだ複雑 • 家の事はプラスαでよい	5	おうちのひとにもきてみよう	• 保護者と協力して非常持ち出し袋を用意する • 非常時の連絡方法や連絡先について家族で話し合う • 自分の役割を知る	• 「わたしにもできるよ」の内容を含め、1つにまとめた • 非常持ち出し用品の写真を解りやすく変更 • 親戚の連絡先を削除 • 書き込み部分の削減
あぶないときどうするの？	• 学校生活の様々な場面(給食中・運動会・階段・校庭など)での地震時の対処について学習する • お・か・し・もの徹底	• 実践的でよい • おかしもは大切 • わかりやすい	3	あぶないときどうするの？	• 学校生活の様々な場面(給食中・運動会・階段・校庭など)での地震時の対処について学習する • お・か・し・もの徹底	変更なし
ひなん場しょはどこかな？	• 災害時の避難場所を知る • 家から避難場所までの道のりを保護者と一緒に確認する • 避難経路に危ない箇所はないか確認する	• 社会科3～4年生の範囲である • イラストの地図がわかりにくい		削除		
どんなことがおこるの？	• 地震などの天災によって起こる被害を知る • 対策として何が必要かを考える	• 書き込む量が多い • 同じ写真が使われている		削除		
わたしにもできるよ	• 保護者と協力して非常持ち出し袋を用意する • 自分の役割を知る	• マッチ・救急箱は見たことのない子供も多い • 家の事はプラスαでよい • 「おうちの人にもきいてみよう」とまとめたほうがよい		「おうちの人にもきいてみよう」の内容とひとつにまとめた		
みんなでたすけあおう	• 救急車の呼び方を知る • 自分の出来ることを考える	• いたずらにつながらないよう工夫が必要	6	みんなでたすけあおう	• 救急車の呼び方を知る • 自分の出来ることを考える	• 「いたずらにつかわないでね」という注意を加えた

その結果、「難易度が高い」「分量が多い」という指摘を受け、評価をもとに補助教材の改訂を行ない補助教材を完成させた。指摘事項と改訂点を**表4**にまとめた。また、**図3**に改訂後の補助教材の一例を示す。

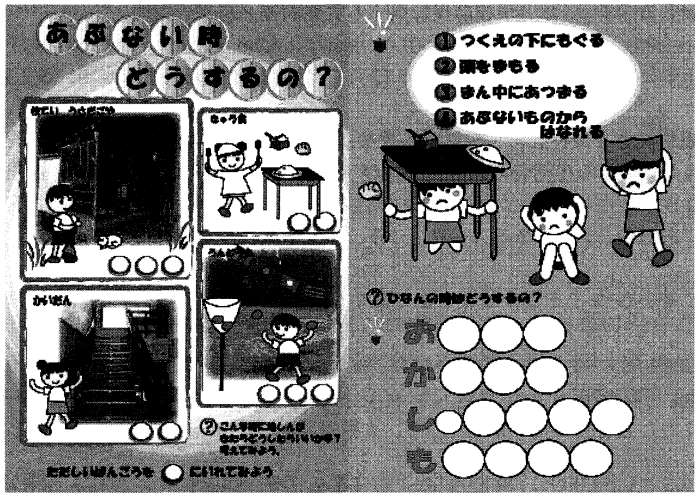

図3　改訂後の補助教材（避難方法を学習するページ）

作成した補助教材は、広く供給するためデータのソフトをホームページ上からダウンロードする供給形式とした。さらに、身近に考えられることが防災には大切であるため、共通部分と地域性を持たせる部分とに分け、地域性を持たせる部分については、各校の学校や通学路の写真を掲載できるように差し替え式とした。

6　おわりに

地震の危険を身近に感じ、早急な対策が求められる現在において、小学校低学年を対象とした避難訓練以外の防災教育は少ない。体験型授業の生活科において防災教育を行うことは、実践的な知識や防災に対する意識を持たせることに有効であり、3年生以降に展開される総合的な学習の時間につながるといえる。また、学校と家庭の両方が協力して防災教育を行う必要もある。今後小学校低学年におけるさらなる防災教育の発展を望む。

本論文をまとめるにあたり、終始ご指導戴いた日本女子大学住居学科石川孝重教授に深謝する。なお、本研究は原梨恵君の協力を得た。同君ならびにヒヤリングにご協力戴いた方々に感謝の意を表する。

引用文献

1）財団法人消防科学総合センター：地域防災データ総覧防災教育編，財団法人消防科学総合センター，平成元年3月.
2）宇野まゆみ：防災教育に果たすべき家庭科の積極的役割について，兵庫教育大学修士論文，平成10年.

3）文部省：防災教育のための参考資料「生きる力」をはぐくむ防災教育の展開，文部省，平成10年３月31日．
4）都市防災推進協議会：都市防災推進協議会ホームページ，
http://www.toshibou.jp/katsudou/kouen/learn/gakusyuukouen_main.html，平成16年６月２日．
5）静岡県教育委員会教育総務課：「学校防災に関する実態調査」結果の概要，
http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-01/bousai/jittaichousa.pdf，平成16年６月10日．
6）文部科学省：小学校学習指導要領（平成10年12月），独立行政法人国立印刷局，改訂版，平成16年１月20日．
7）谷川彰英：問題解決をよぶ社会科・生活科の授業，明治図書出版株式会社，第１版，平成６年11月．
8）嶋野道弘：実践からつくる生活科の新展開―学び・体験・かかわり・遊び―，東洋館出版社，第１版，平成11年３月10日．
9）中野重人ほか：あたらしいせいかつ１・２上；下，東京書籍株式会社，平成16年２月10日；平成16年７月10日．
10）今野喜清ほか：せいかつ 上そよかぜ；下ひだまり，教育出版株式会社，平成16年１月20日；平成16年６月20日．
11）武村重和ほか：せいかつ 上わくわくせいかつ；下いきいきせいかつ，株式会社新興出版社啓林館，平成16年２月10日；平成16年６月10日．
12）藤井千春ほか：わたしたちのせいかつ上；下，大阪書籍株式会社，平成16年２月９日；平成16年６月10日．
13）加藤幸次ほか：せいかつ１・２（上）；（下），日本文教出版株式会社，平成16年１月15日；平成16年６月15日．
14）森隆夫ほか：せいかつ 上みんなだいすき；下みんなともだち，光村図書出版株式会社，平成16年２月５日；平成16年６月５日．
15）西村肇ほか：こどものせいかつ 上どうしてそうなの；下ほんとうはどうなの，一橋出版株式会社，平成15年２月10日；平成16年６月10日．
16）滝沢武久ほか：たのしいせいかつ上―なかよし；下だいすき，大日本図書株式会社，平成16年２月５日；平成16年６月30日．
17）北尾倫彦：みんなとまなぶしょうがっこうせいかつ上；みんなとまなぶ小学校せいかつ下，学校図書株式会社，平成16年２月10日；平成16年７月１日．
18）宮澤至勢：せいかつ上あおぞら；せいかつ下そよかぜ，社団法人信濃教育会出版部，平成14年２月10日；平成16年６月15日．
19）飯泉知花，久木章江：幼児期の防災教育のあり方と教材の作成，日本建築学会大会学術講演梗概集，13011，pp.739～740，平成16年８月．